琉球大学学術リポジトリ

教育実習に関する調査研究（第２報）　―３年次を対象として、４年次との比較―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター
	公開日: 2008-11-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 米盛, 徳市, 新里, 里春, 中里, 治男, Yonemori, Tokuichi, Shinzato, Rishun, Nakazato, Haruo
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7973

教育実習に関する調査研究（第2報）

－3年次を対象として、4年次との比較－

米盛徳市*　新里里春**　中里治男***

（1993年6月30日受理）

本調査研究は、第1報を踏まえて3年次実習生の実習の意識を4年次との比較でもって特徴を明らかにすることとした。対象は平成2年10月に附属学校で教育実習2を終了した本学部3年次学生である。調査は平成2年12月の事後指導の時限に参加者全員に実施した。調査に協力した学生は、小学校課程男子17名、女子59名、中学校課程男子11名、女子15名であった。調査用紙は第1報と同一のものを用いた。質問項目は第1報を参照。調査は学生に調査目的を述べ、了解を得た上で無記名で実施した。

結果と考察

図1は「教育実習の意義」についての回答である。第1報の4年次の実習と異なる点は、一位に「子どもの実態理解」を挙げ、二位に「教師の仕事理解」ができたことである。三位に「教職への意欲の高まり」を挙げ、四位に「教材研究の方法が分かった」ことを挙げていた。これも4年次とは趣を異にしていた。これは3年次にはまだ教材研究が進んでないことによるものであり、当然の結果といえよう。ところで平成5年度からは3年次に実習が課されるが、この結果を見るかぎり、附属校の負担を軽減する方策をとらないと負担は大きいといえよう。この領域が事前指導に課された課題であるといえよう。

図2は「教育実習に参加して楽しかったこと」を示している。学年とも一位に「子供と話をしたり、遊んだりしこと」を挙げた。次に楽しかったことは、「授業中に子供がよく反応してくれたこと」と「実習生同士の繋がりが得られたこと」であった。これは3年次が4年次よりも大きく感じられたようだ。4年次はこれらの積み重ねであるので当然なことであろう。

図3は「教育実習中につらかったこと、困ったこと」を示してある。4年次と3年次にほとんど差がなかった。一位は「教材研究や教育実習の記録等に夜遅くまで時間がかかったこと」で、二位は「早起きしなければならなかったこと」、三位と四位はほぼ同じで、「私用が果たせなかったこと」と「教育実習の期間中、ずっと緊張が続いたこと」であった。

図4は「授業にあたって辛かったこと、困ったこと」を示している。両学年とも一位に「教科に関する専門的な知識が不足していたこと」を挙げ、二位に「教材研究に当たって子供の実態がよく把握できていなかったこと」、そしてほぼ同率で「教材研究の時間が十分にとれなかったこと」と、さらに「授業案や教育実習録を書くこと」をほぼ同率で挙げた。実習中の問題は四年次とほとんど差はなかったが、特徴的なのは、五位の「授業の進め方が分からなかった」ことであった。これは、4年次の一割台に対し約三割がそのように答えて、全体のパーセントを上げていた。

図5は「自分の（教壇）自習でつらかったこと、困ったこと」を示している。最も高い比率

*　琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター
**　琉球大学教育学部（教育心理学科）
***琉球大学教育学部（数学科）

を示したのは「子どもからの質問に適切に対処できなかったこと」、次に高い比率を示したのは「子どもの反応をよく理解できなかったこと」と「子どもに自分の意図が伝わらなかったこと」である。次いで3年次特有な、「収拾がつかなくなったこと」であった。3年次に全実習を終わらせる場合には、このような問題を十分予想し、学生が自信喪失のまま大学を卒業しないように事前指導や事後指導を充実させることが大事である。

図6は「授業以外に子どもとの日常的な接触や生活の中で辛かったこと困ったこと」を示している。最も多かった反応は、4年次と同じく「子どもを注意したり叱ったりする方法やタイミングがよく分からない」ことである。次いで4年次と同じく「掃除のときの接し方」や「子どもの気持ちや行動の把握」がうまくいかなかったことが辛いこととした。この問題は4年次まで持ち越しているのか、3年次にそのように回答した人が4年次にもそうなるのかは定かではない。

図7－1～3は「教育実習に参加する前に必要な学習」についての回答である。3年次がデータを押し上げたせいで、「発問や答の受け止め方、説明の仕方」が一位となり、4年次で一位だった「ほめ方、しかり方、意欲を高める方法」が二位となり、三位は4年次の順位と同じで「各教科の内容をくわしく知る」であった。四位に3年次の特徴を示す「教材研究の方法」が「子ども理解の方法」よりも多かった。

図8－1～3は「教育実習の終了時にどんな学習が必要だったか」を問うたものである。3、4年次で差が見られたのは教授法の領域で「発問や答の受け止め方、説明の仕方」で、3年次に多かった。3年次で多かったものは「子ども理解の方法」と「教材研究の方法」であった。これらはごく当然であるが、この種の問題を4年次まで持ち越さないようにしたかどうかが知りたいところだが、これについては今回の研究では明らかにされなかった。

図9は「特別活動への興味・関心」で、3年次が4年次に比し特徴的なものは、「学級会活動」であった。両群で一位に挙げたのは「学級指導」で、三位「無回答」、四位「学校行事」であった。「学校行事」への関心は4年次に多く、3年次はまだそこまで気が回らないということだろうか。

図10は上記「特別活動に直接関わったか否か」を見たものである。「学級会活動」以外は4年次と大分差があり、3年次の実習はそこまでは期待されていなかったと言えよう。

図11は「教科指導以外の指導」の是非を問うた結果である。3、4年次とも「計画的に指導できるようにしてほしい」と答えたものが65パーセントで、残りは「現行のままでよい」と答えていた。

図12は児童・生徒と接したり、指導する時間が取れたか否かを見たもので、3、4年次とも「時間があり接触・指導できた」が一位で、「時間がなく接触できなかった」は、3年次が4年次よりは多かった。実習の性質上その逆の結果であるべきなのに、何故そうなったのか理解できない結果である。

図13は道徳の授業をしたか否かを見たもので、3、4年次とも同率で「しない」ものが一位であった。

図14は「道徳の授業を実施しての感想」を見たもので、両年次とも100パーセント「参考になった」と答えた。

図15は道徳の授業を担当しなかった学生に、その必要性を問うたものである。両年次とも「する必要がある」と答えたものが7割で、特に3年次は「どちらでもない」と思っているものは少なかった。

図16は「教育実習の事前指導」で3、4年次で差の大きかった要望は、「担当教官と事前に話し合える機会」であった。3年次は附属学校であったにも関わらずそのような要望が多かったのは意外であった。今後附属学校ですべての実習をすることになるのだから率先してそのような機会を作る学生が増えてほしいものである。

図17は「教育実習をどの学年でしたらよいか」の設問に対する答えである。4年次は「現行のように4年次だけでよい」として、3年次との

違いが特徴的だった。3年次は4年次の公立での経験がないからそうなるのは当然である。この種の調査への回答には自分の経験を超越することは難しいし、学年の決定等は、学部が教育的な見地から実施していいといえよう。

図18は実習期間についての意見である。両学年とも現行の2週間を圧倒的に多く支持し、3週間、そして4週間の順であった。これについても教育的な見地から適切な期間を学部が示していいだろう。

図19－1～20は学生の「子供、教師、親」観を示している。3年次と4年次の間にほとんど差を見なかったので、ここでは図を示すだけにとどめる。

おわりに

3年次と4年次の回答にほとんど差は見られなかったが、3年次の特徴は児童・生徒の理解と生徒指導の力量不足であった。平成5年度から3年次で、そして附属学校での実習だけで全ての実習を終了させるシステムが導入されることになるが、これらのデータが示唆することも補完できるように実習が組み立てられることを附属学校に期待するものである。

＜参考文献＞

1　新里里春、米盛徳市、上原盛文（1993）教育実習に関する調査研究（第1報）（本紀要）

図1　教育実習で有意義だったこと

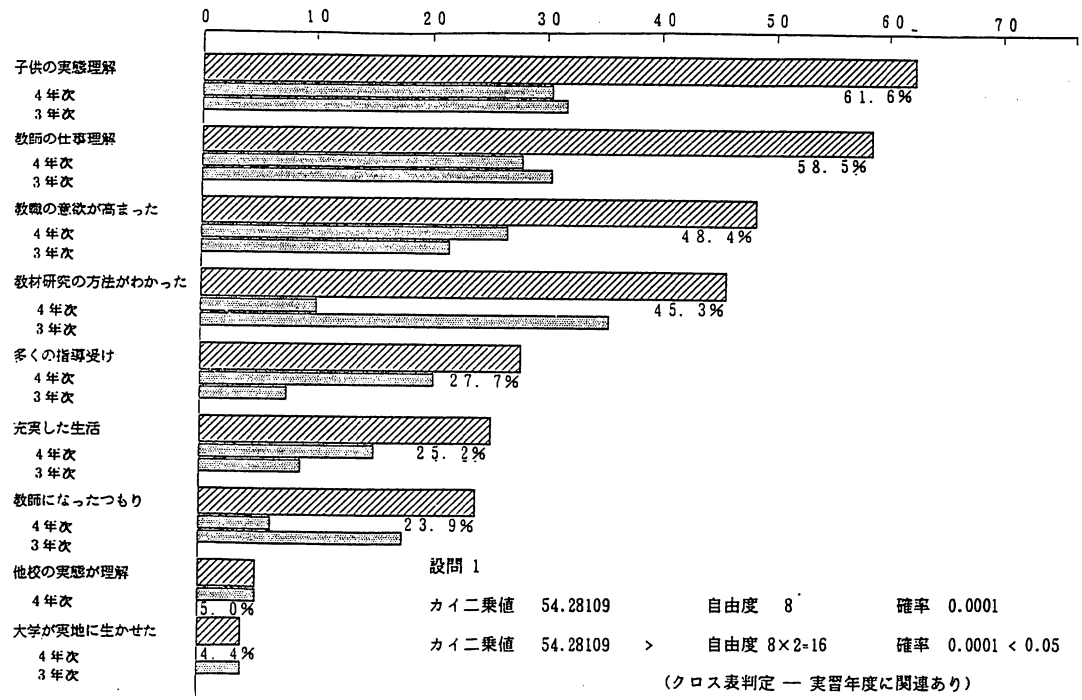


図2　教育実習で楽しかったこと

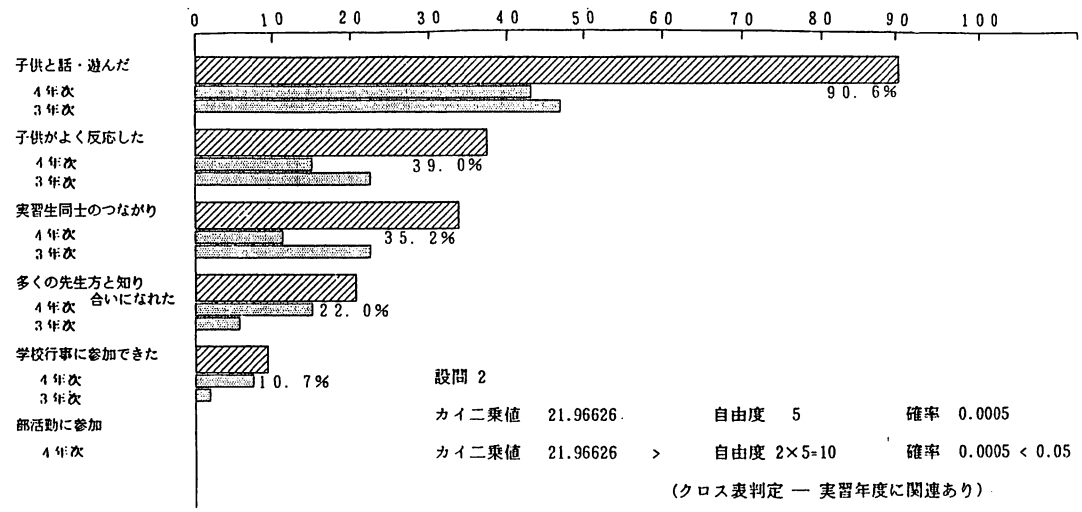
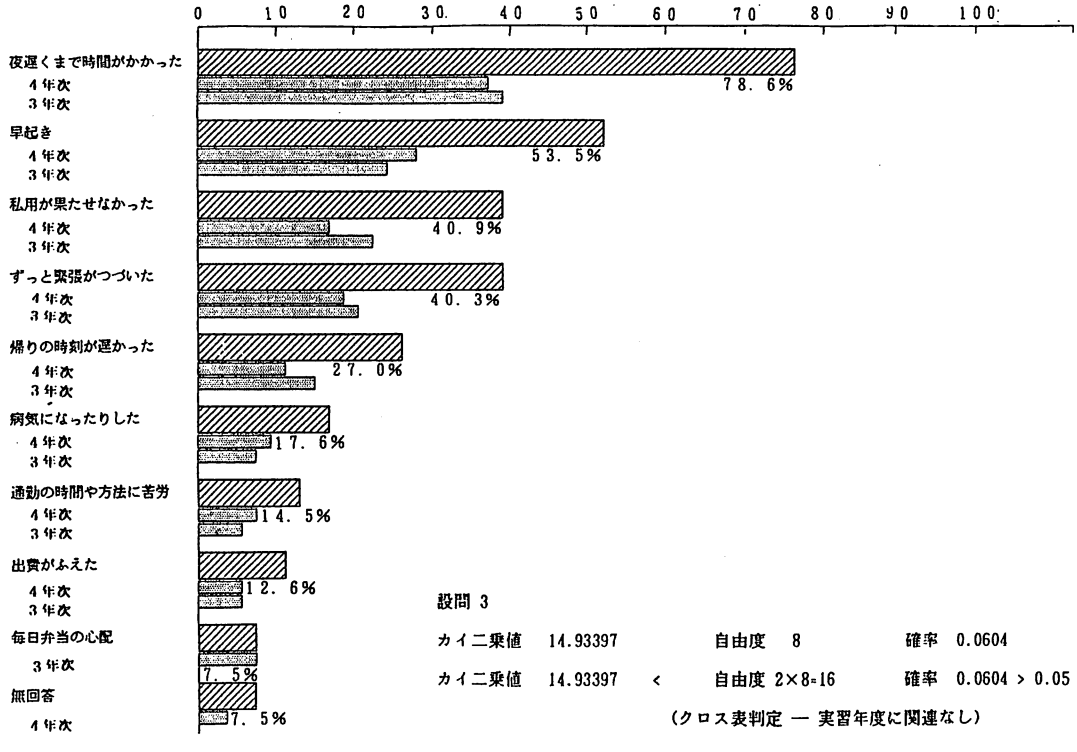


図3　教育実習中つらかったこと



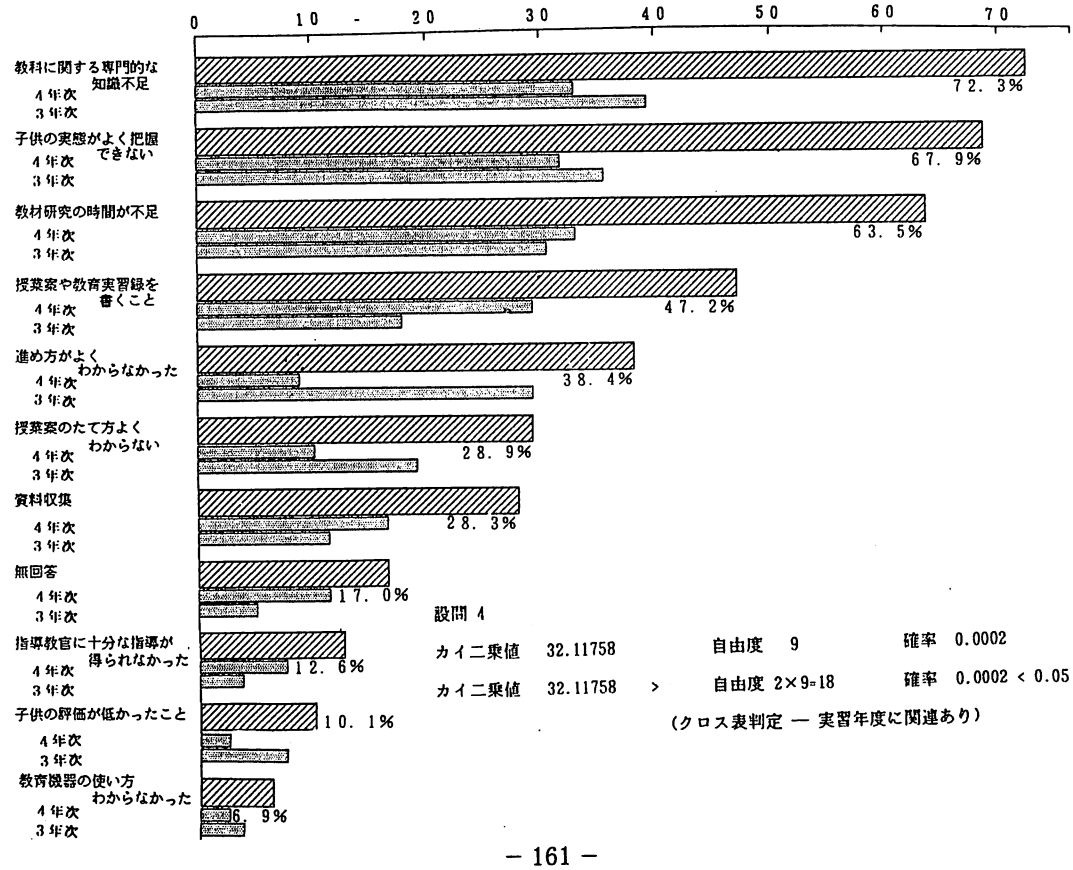
設問 3

カイ二乗値　14.93397　　自由度　8　　確率　0.0604

カイ二乗値　14.93397　<　自由度 2×8=16　　確率　0.0604 > 0.05

(クロス表判定 ― 実習年度に関連なし)

図4　授業に当たって辛かったこと、困ったこと



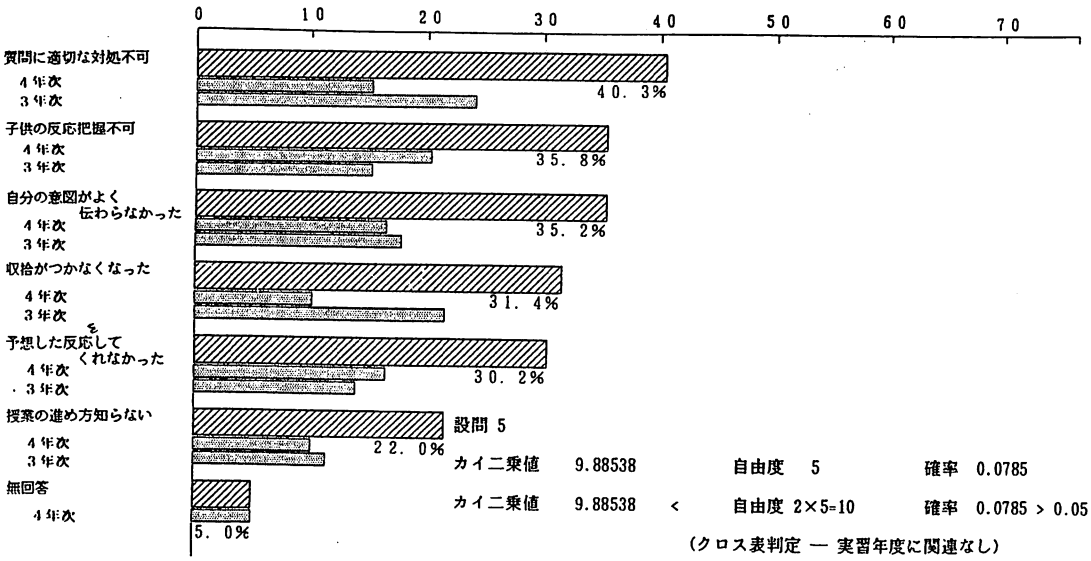
設問 4

カイ二乗値　32.11758　　自由度　9　　確率　0.0002

カイ二乗値　32.11758　>　自由度 2×9=18　　確率　0.0002 < 0.05

(クロス表判定 ― 実習年度に関連あり)

図5　自分の授業でつらかったこと



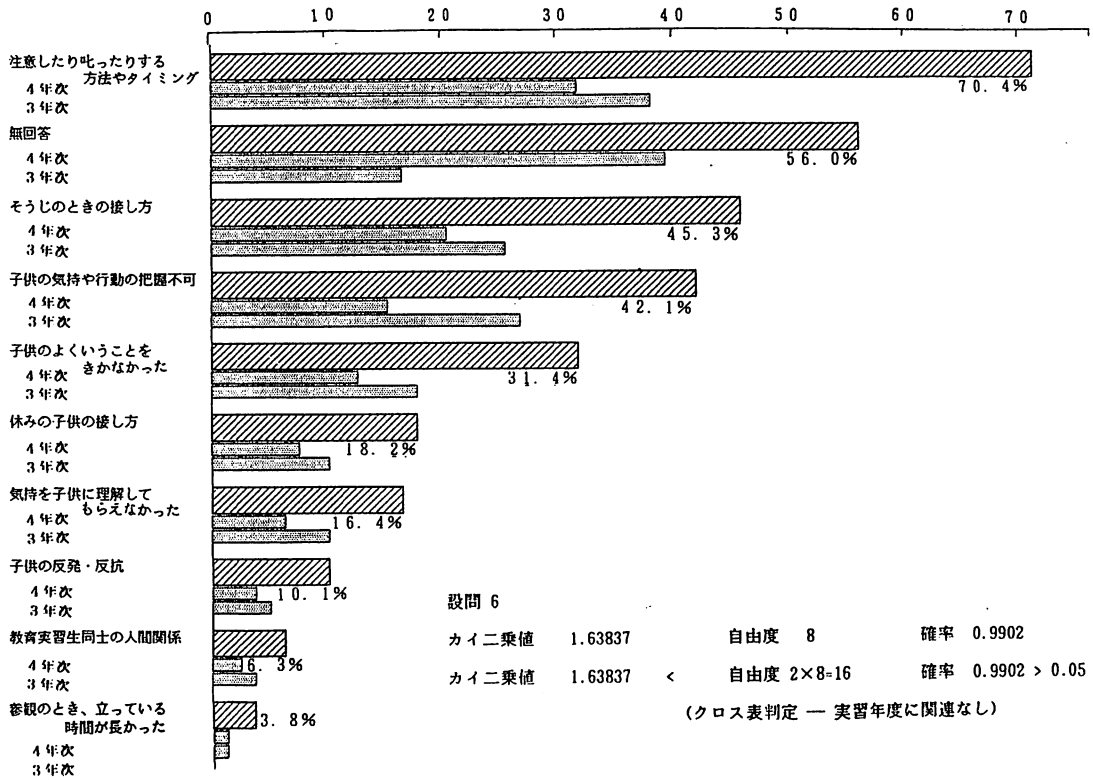
設問 5

カイ二乗値　9.88538　　自由度　5　　確率　0.0785

カイ二乗値　9.88538　<　自由度 2×5=10　　確率　0.0785 > 0.05

（クロス表判定 ― 実習年度に関連なし）

図6　授業以外で日常的な接触や生活で辛かったこと



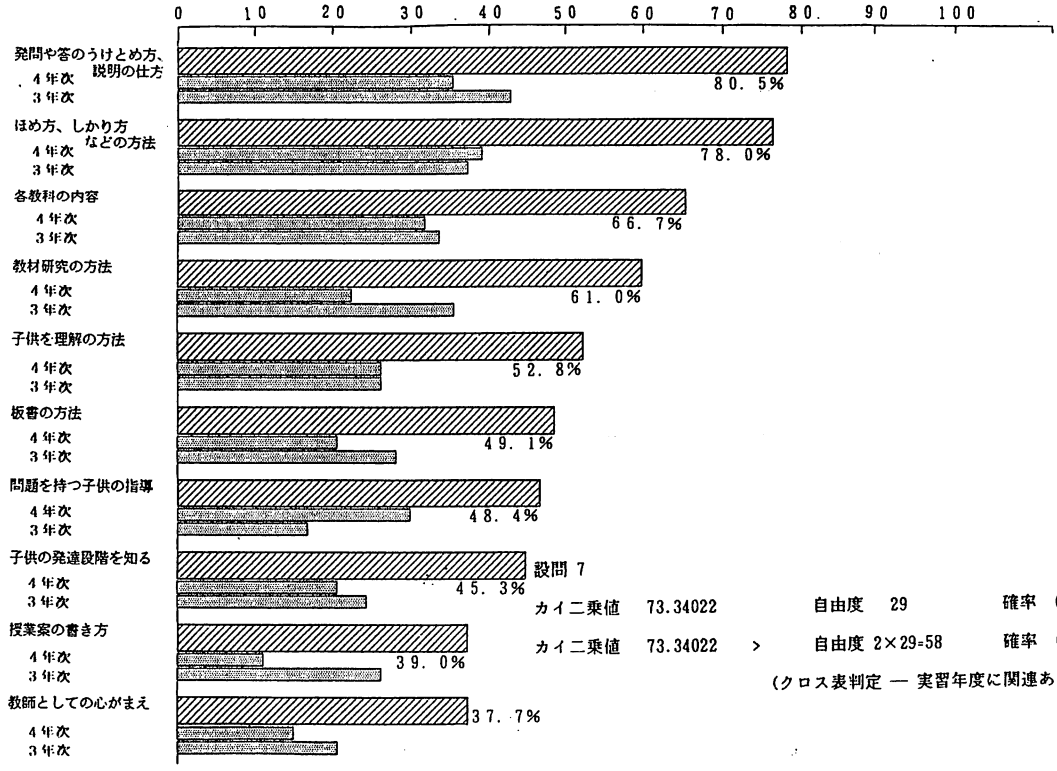
設問 6

カイ二乗値　1.63837　　自由度　8　　確率　0.9902

カイ二乗値　1.63837　<　自由度 2×8=16　　確率　0.9902 > 0.05

（クロス表判定 ― 実習年度に関連なし）

図7-1　教育実習に参加前の学習の必要性



設問 7

カイ二乗値　73.34022　　自由度　29　　確率　0.0001

カイ二乗値　73.34022　>　自由度 2×29=58　　確率　0.0001 < 0.05

(クロス表判定 ― 実習年度に関連あり)

図7－2

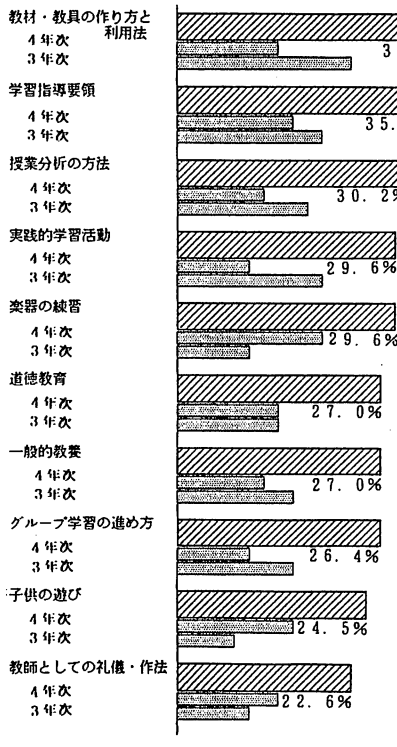


図7 3

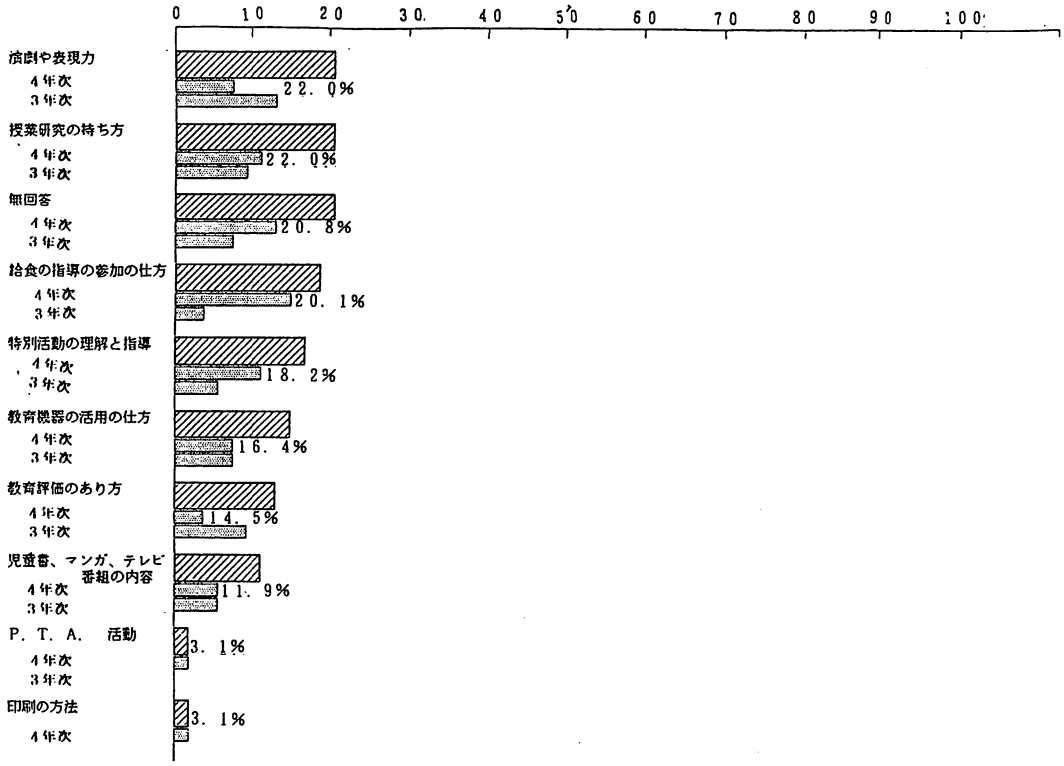


図8 1 これから学ぼうと思っていること

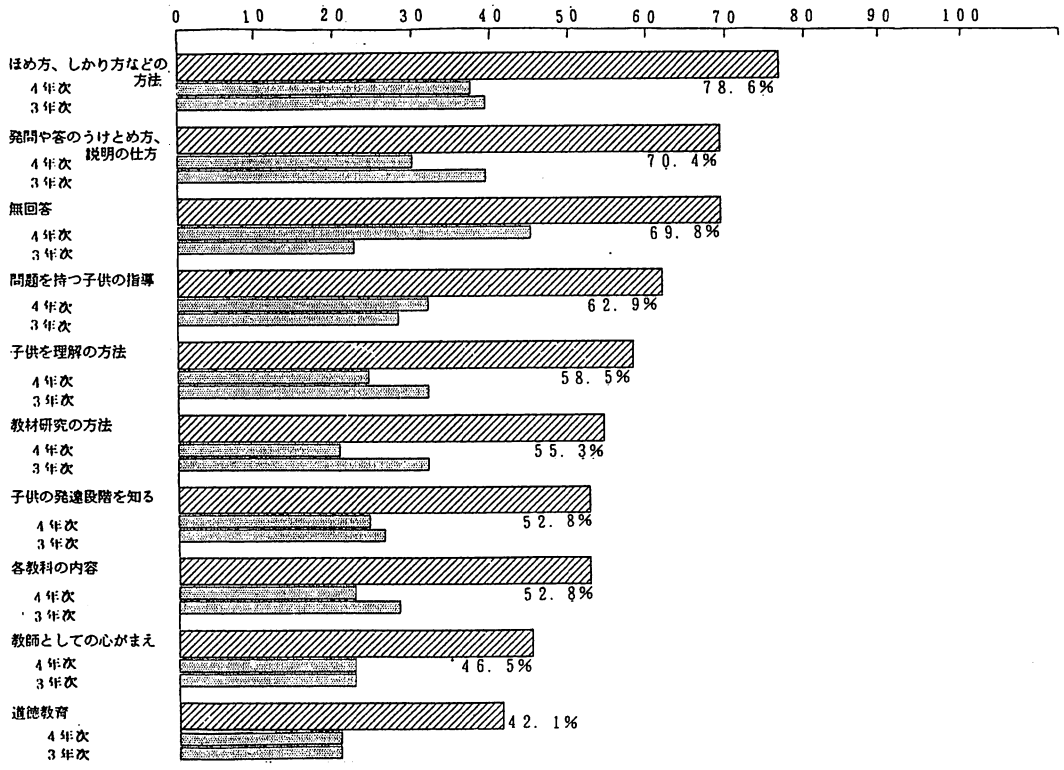


図8 2

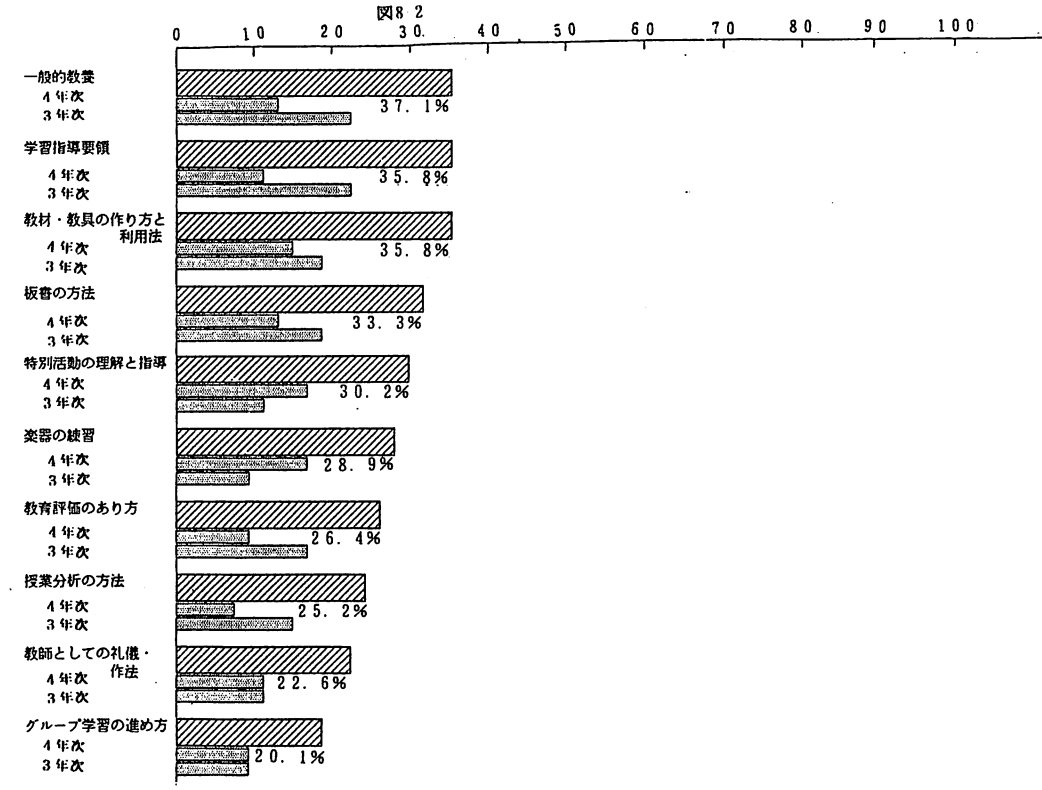
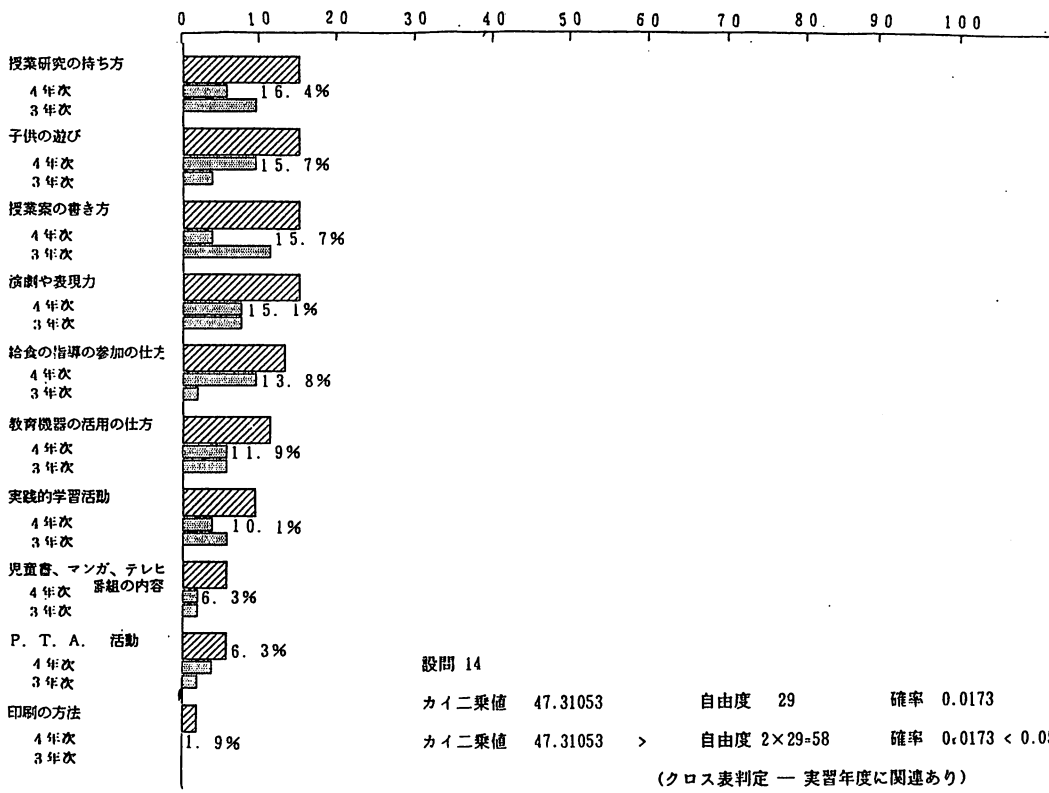


図8 3



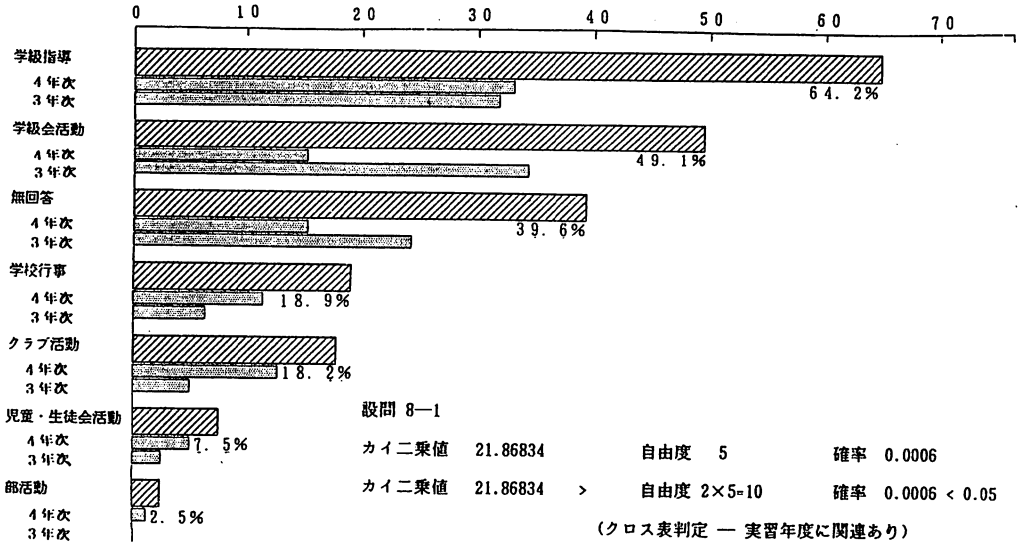
設問 14

カイ二乗値 47.31053 自由度 29 確率 0.0173

カイ二乗値 47.31053 > 自由度 2×29=58 確率 0.0173 < 0.05

(クロス表判定 ― 実習年度に関連あり)

図9　教育実習中に最も関心・興味のあったもの



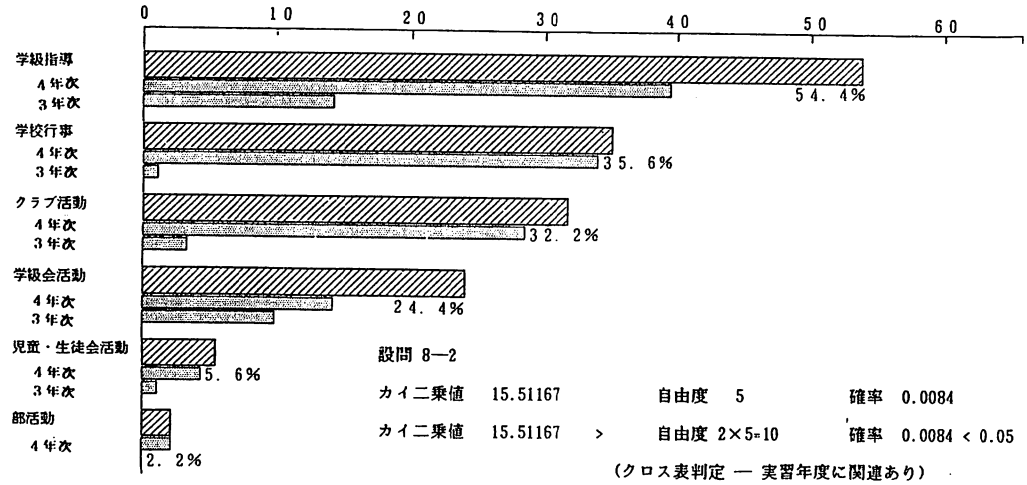
設問 8—1

カイ二乗値　21.86834　　自由度　5　　確率　0.0006

カイ二乗値　21.86834　>　自由度 2×5=10　　確率　0.0006 < 0.05

（クロス表判定 — 実習年度に関連あり）

図10　特別活動で直接指導する機会のあったもの



設問 8—2

カイ二乗値　15.51167　　自由度　5　　確率　0.0084

カイ二乗値　15.51167　>　自由度 2×5=10　　確率　0.0084 < 0.05

（クロス表判定 — 実習年度に関連あり）

図11　教科指導以外の活動についての意見

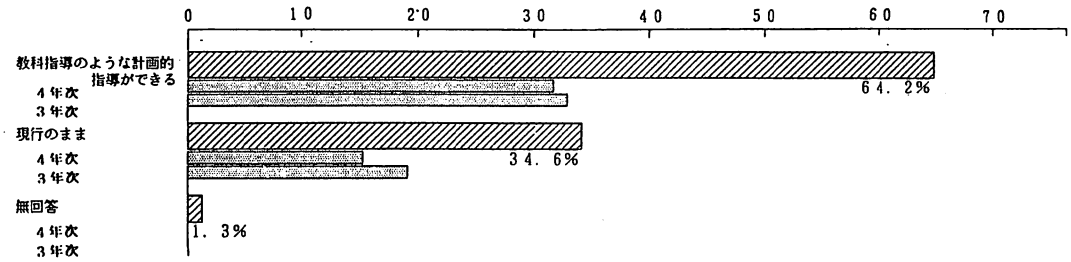


図12　特別活動について

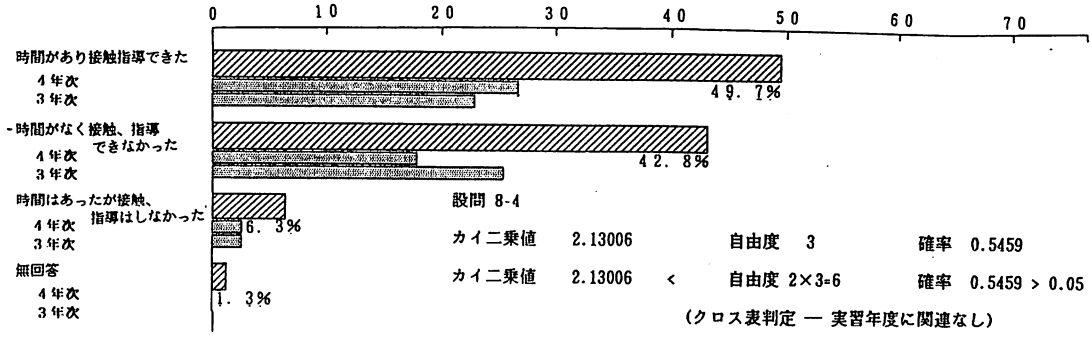


図13　道徳の授業実施の有無

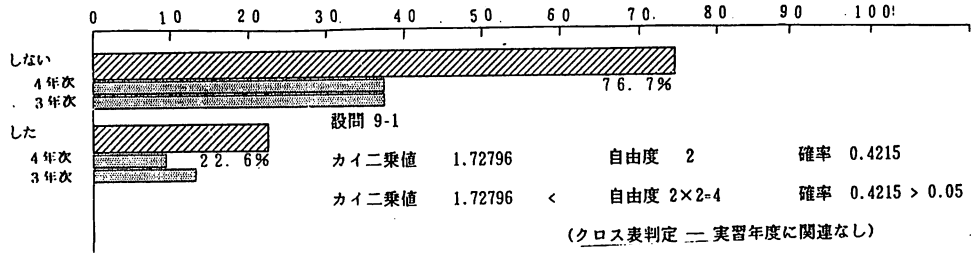


図14　道徳の授業を実施して

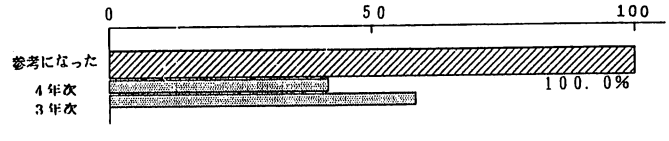


図15　道徳の授業を実施することについて

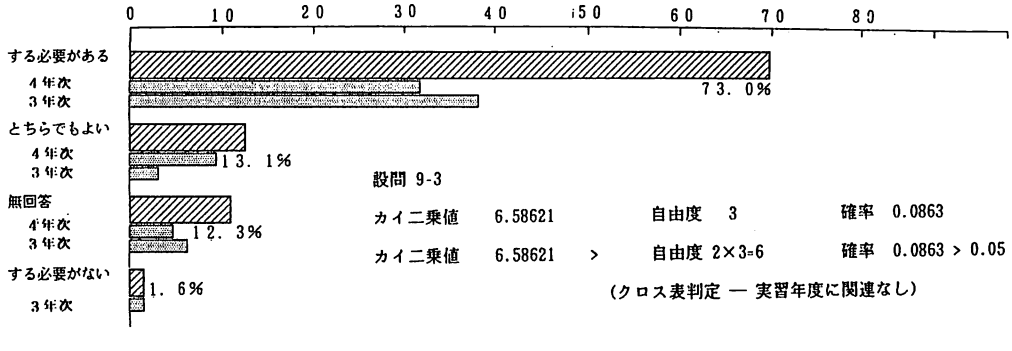


図16　事前指導として、どんなことを要望するか

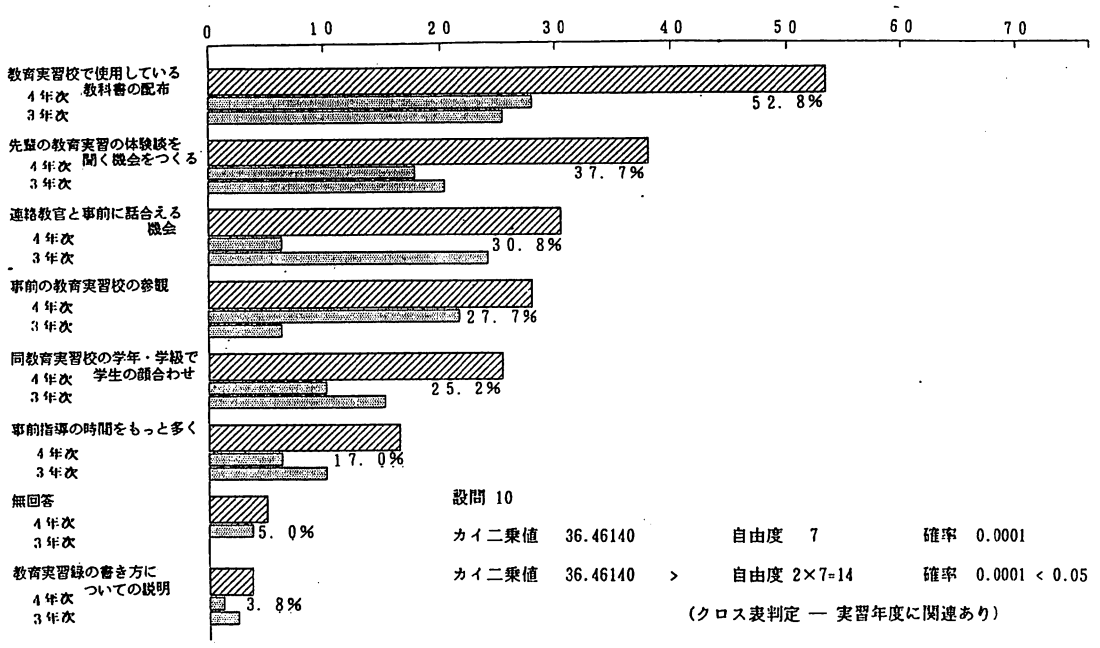


図17　教育実習への参加学年について

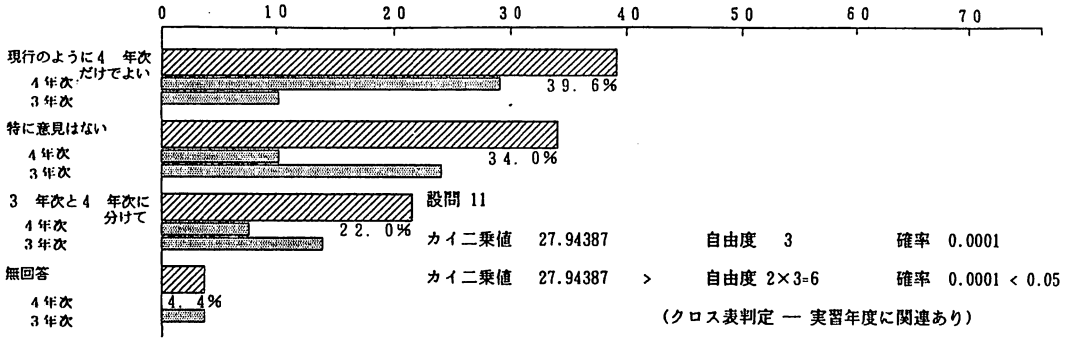
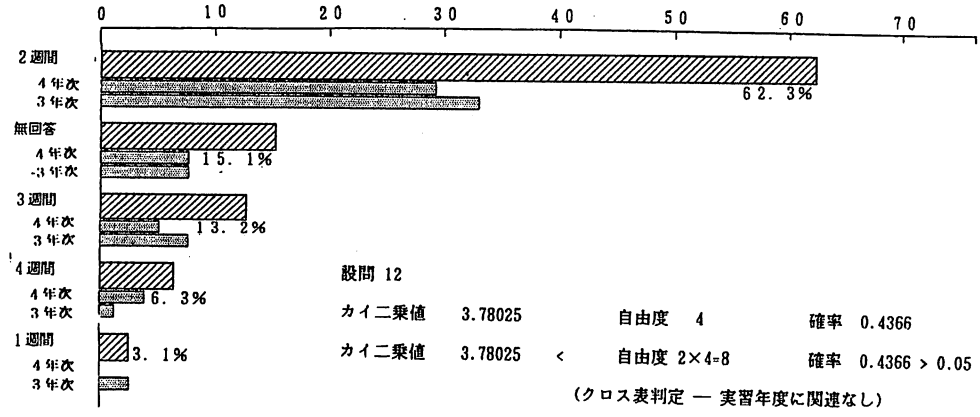


図18　教育実習の期間は何週間が適当か



設問 12

カイ二乗値　3.78025　　自由度　4　　確率　0.4366

カイ二乗値　3.78025　<　自由度 2×4=8　　確率　0.4366 > 0.05

（クロス表判定 ― 実習年度に関連なし）

図19-1　家でもっと勉強させる

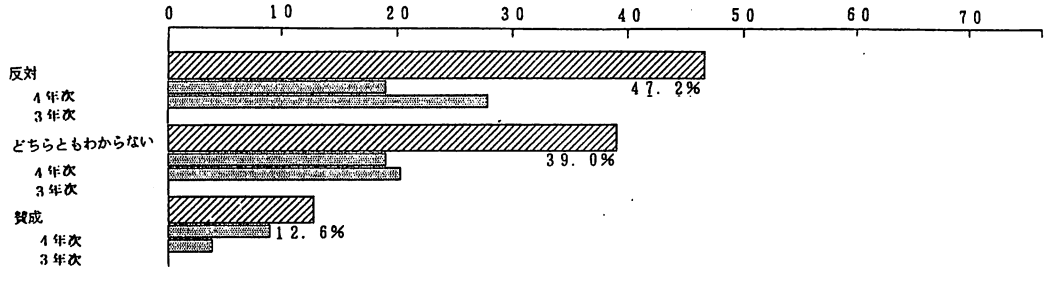


図19-2　親や教師の言うことをきかないもの

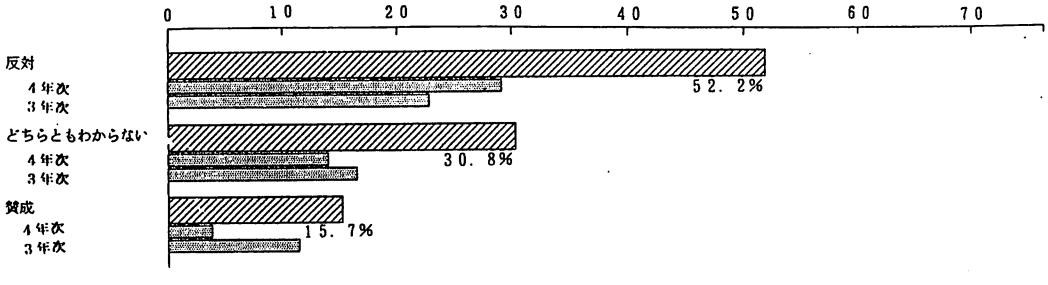


図19 3　成績があがらない原因は熱心に勉強しないから

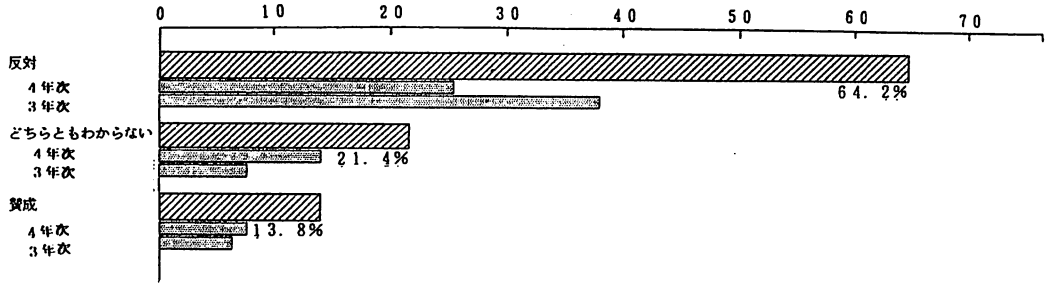


図19 4　ごく普通の礼儀すら欠けている

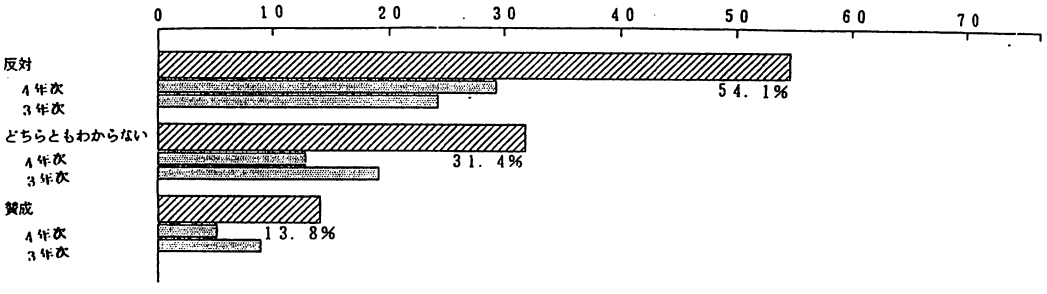


図19 5　子供は権威に反抗すべきではない

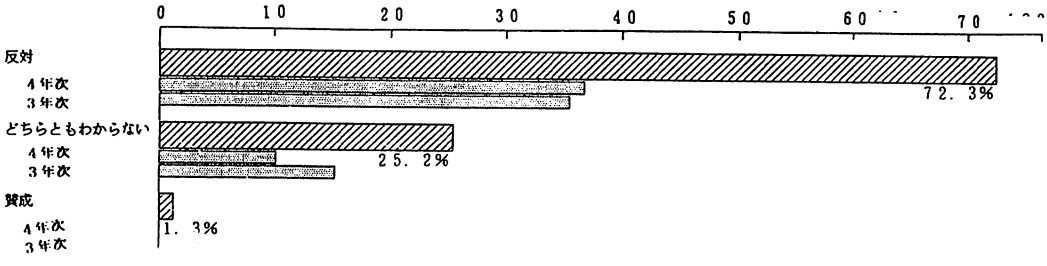


図19 6　適切な推理、考えはできない

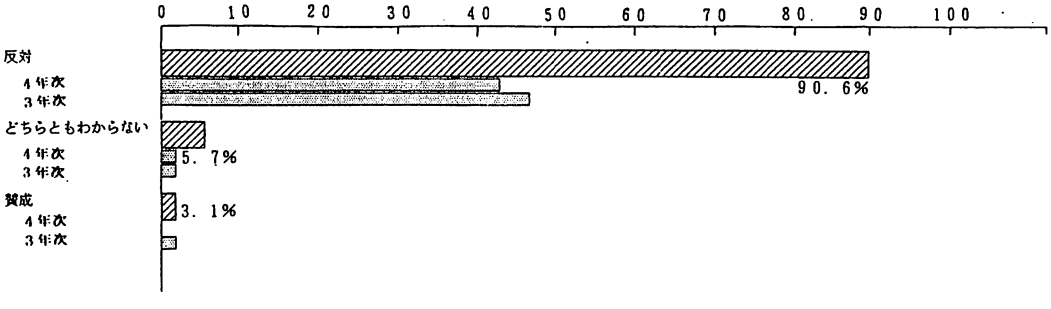


図19-7　教師の指示に従わないのは教師の責任

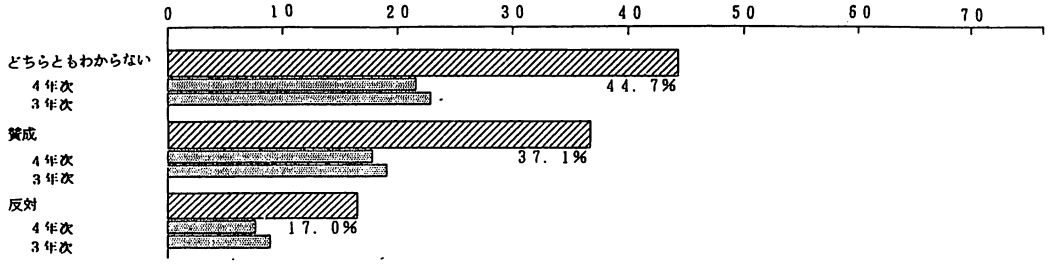


図19-8　教師は自分の無知を認めてはならない

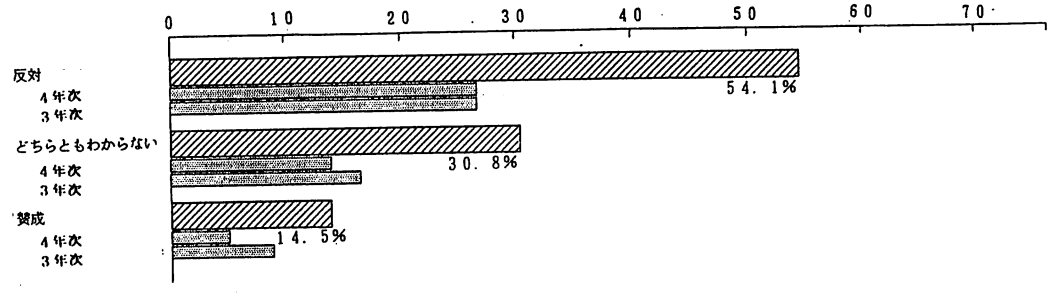


図19-9　師は権威を示すべき

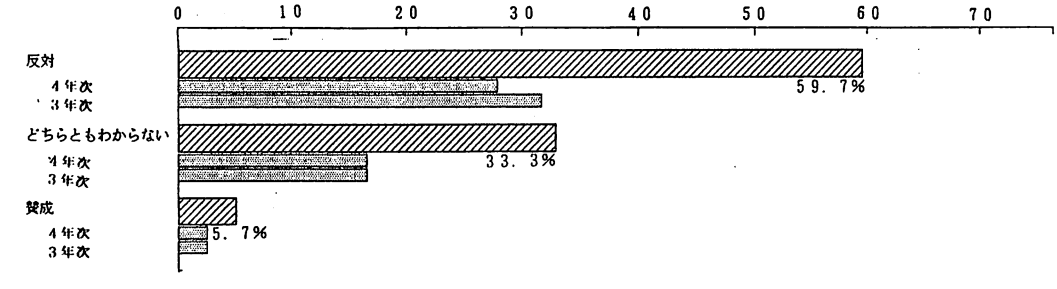


図19-10　攻撃的な子供は困る問題

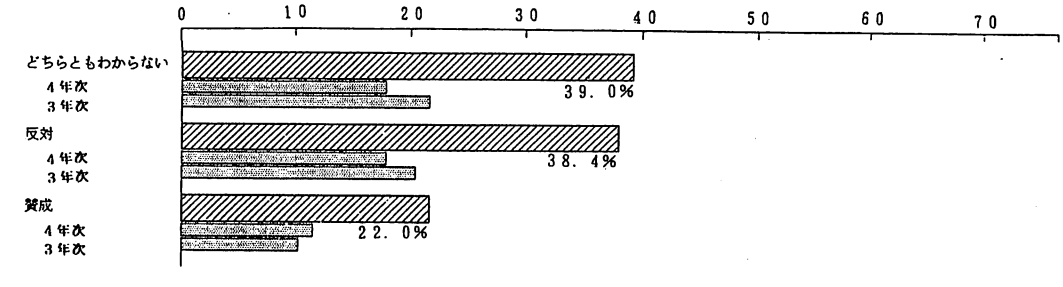


図19-11　しつけの問題は教師のあやまちでは起こらない

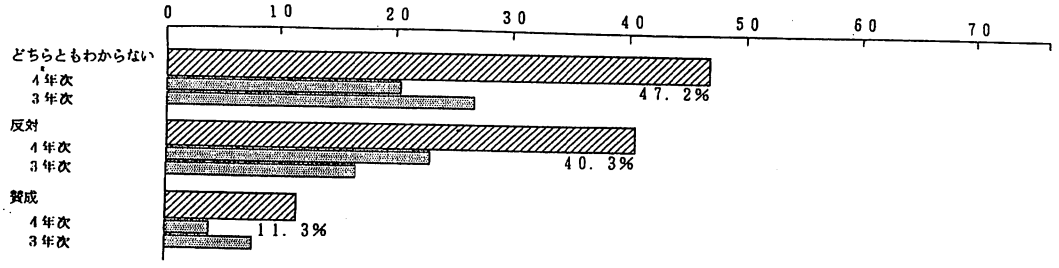


図19-12　子供から好かれる教師はよく理解できる

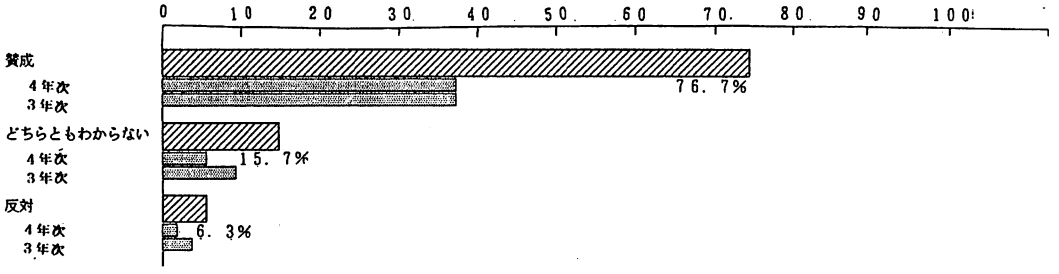


図19-13　親はどんな勉強をしているかもっと知るべき

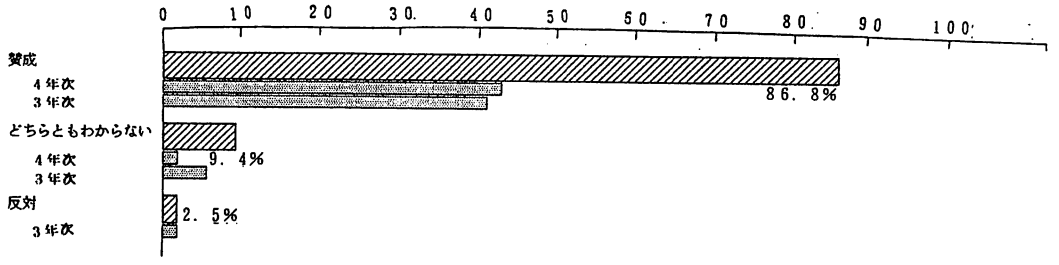


図19-14　親はどんな友達と遊んでいるかよく知っている

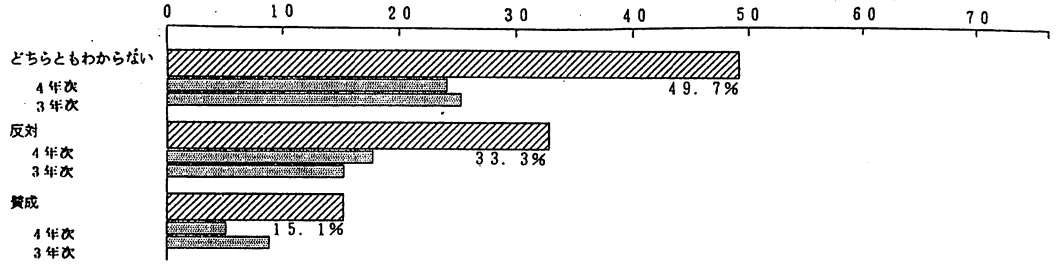


図19-15　親は家での生活の様子を先生に伝えなくてもよい

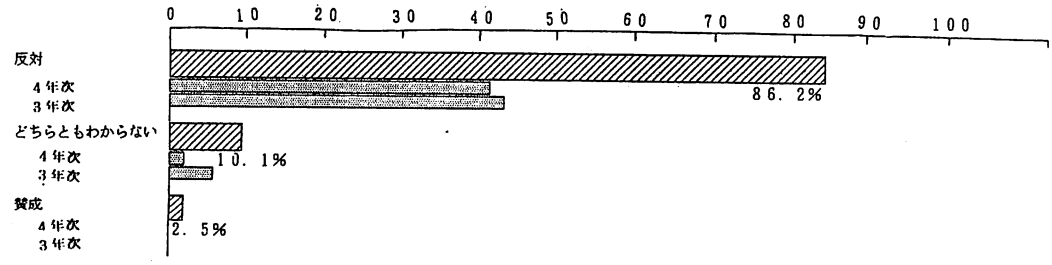


図19-16　親はもっと子供を厳しくしつけるべき

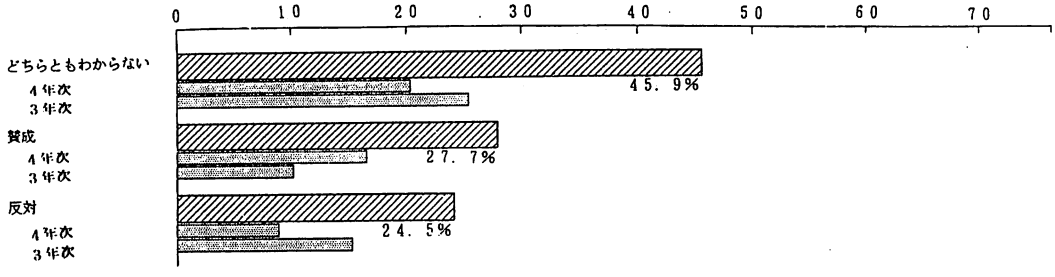


図19-17　親は国の教育行政に関心を示すべき

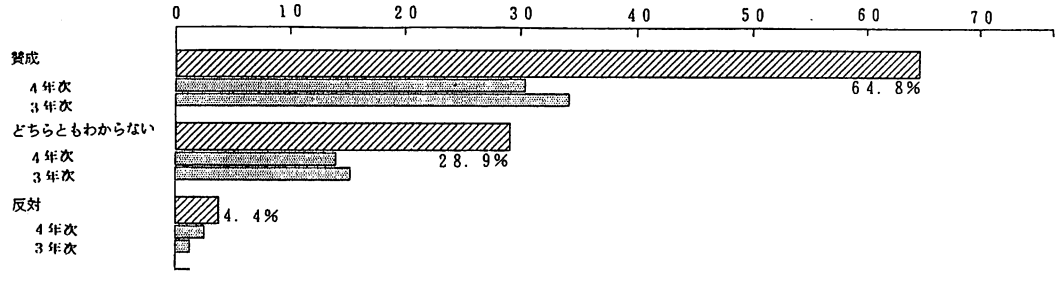


図19-18　問題行動の大半は親の責任

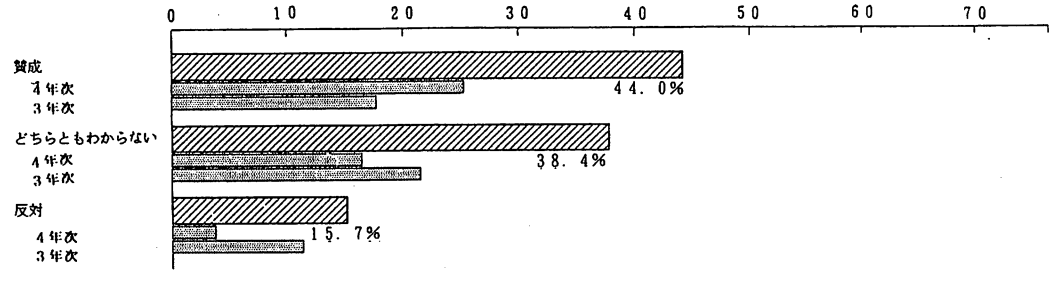


図19-19　自分から伸びようとする力を持っている

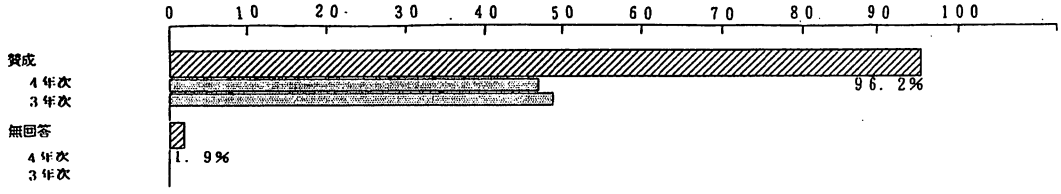
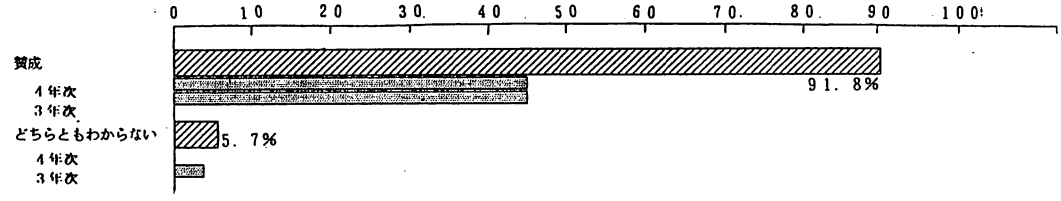



図19 20 親は学校の教育方針に関心を示すべき